

インタビュー（２）

岡崎久彦氏（元駐タイ大使）

聞き手 五百旗頭真（神戸大学法学部教授）

田中明彦（東京大学東洋文化研究所助教授）

村田晃嗣（広島大学総合科学部専任講師）

場所 博報堂役員室（東京ビル）

日時 1995年12月18日午後3時から4時30分

村田 まず最初に確認させていただきたいのは、先生、在米大使館に最初にご勤務の時期はいつからいつまででしょうか。

岡崎 71年の2月から73年の10月までですね。

村田 そのあとすぐに韓国にいらっしゃいますね。

岡崎 韓国です。

村田 まさにその時期がわれわれの主たる関心の時期でして。

岡崎 ああそうですか、ニクソン・ショックの頃ですね。

村田 71年2月のご赴任までは本省でいらっしゃいますか。

岡崎 本省です。分析課長、調査課長、調査室長かなんかやった。

田中 在外の部分が私共の作った表に入っていないので、抜けちゃってるんです。

村田 事前に簡単な質問表のようなものを差し上げたんですが、70年代前半のですね、ニクソン・ショックがあったり米中接近があったり、国際政治が構造的に変わる時期ですけれども、その時期の先生ご本人の国際情勢の分析や認識が、外務省そのものの考えとどの程度共通部分があってまたちがったのかというあたりから、お話しを伺えましたら。

岡崎 この頃は例の沖縄返還ですからね。それから70年安保。それが全部すみまして。たしか71年に出版された外交青書をね、私が書いたんですよ。そこで外交青書では初めてね、日米関係が一番大事だと書いたんです。文章は忘れましたが。これはね、私が2月に赴任しましたが、赴任した時にエリクソン日本部長がね、あの文章を俺はもう何回引用させてもらったかわからないぞと、アメリカの中でね、そういつてました。もっとも、あれはいつも4月頃にでるから前の年かな。70年に出た外交青書ですね。それがはじめてね、朝日新聞に褒められましたよ。外交青書が内容が充実して来たって。ただね、気になるのはね、全部読んでも憲法という字が一度も出てこない。よほど日本の憲法嫌いなんだろうって書いてました。ついでにいうと、その次年の外交青書を朝日は同じコラムで「外交無書」って書いた。それでね、私は70年安保の前の大学紛争の時、その前から70年安保対策をやってたんです。それであの頃の愛知さんの書いたものはみんな私が書いたものです。「文芸春秋」「諸君」ね。

五百旗頭 愛知揆一さん？

岡崎　そうです。それから佐藤さんの演説もみんな私が書いたんです。それが調査課長の仕事だった。分析課長の時はちゃんと分析したんですが、調査課長ってのは仕事ないんですよ。総務的な事務で自分自身の仕事はなくて、スピーチ・ライターやってたんです。それで、69年中に70年安保・大学紛争を粉碎して、沖縄返還やって、それで随分スピーチも書いて、これで仕上がったと思って、外交青書に日米関係が一番大事だと書いた。それまではね、三原則で一が国連、二だか三だかがアジアとアメリカでした。それでもうすっかりすんだと思って71年にアメリカにいったらですね、7月か8月にニクソン・ショックがあった。そこからの話しですよ。

田中　その前のあたりもですね、少し。ショックの前後ということなので、できればガム・ドクトリンあたりから沖縄返還を経てショックがあつて、そのあと。このプロジェクト自体はニクソン・ショック前後なんですけれど、将来的に考えるとまた時代も進むので、もし時間がゆるせば「大綱」前後「ガイドライン」あたりまで、もしうかがえればと思うんですが。時間の関係で、とりあえずクロノロジカルに。

岡崎　もう少し遡っていくと沖縄返還ですよ。沖縄返還はね、これは私調査課長ですから、学者と連絡の仕事があつた。佐藤総理がね、楠田秘書官ってのを使つてね、学者グループの意見をしょっちゅう聞いてたんですよ。高坂正堯、江藤淳、山崎正和、衛藤瀧吉、永井陽之助、それから。

五百旗頭　梅棹忠夫とか。

岡崎　梅棹忠夫、京極純一ね。この二人はあんまり出ないんですけどね。要するに、あの頃の大御所二人っていうんで。今いった名前だけだと思いますよ。その事務局のようなことをやってたんです。外務省の課長ですから、そういう立場でもって、スピーチ・ライターとプランニング・スタッフみたいなことをやってましてね。それで沖縄返還はもういいですね。

五百旗頭　それ自体は結構です。これやりだすとそれ自体大変だから。

岡崎　結局、核抜き本土並みに落ち着くところまではいいですね。それがすんで、むしろニクソン・ショックにつながるのは中国関係ですよ。中国関係はね、これはどこからさかのぼっていいんだかわかんないんですけども、68年だったか69年だったかにカナダが中国承認するんですよ。

田中　70年に入ってからじゃなかったですっけ。

岡崎　いや入ってないと思うんですよ。僕は政策企画協議でね、カナダ行ったんですから。68年か9年だと思います。カナダとイタリアだった。その前にドゴールがやったのは64年ですね。ドゴールがやってから文化大革命になってドタバタになったんで、文化大革命が少しおさまりかけたところでいたカナダがやった。

五百旗頭　まだまだでもおさまってないですよ。

岡崎　ええ、それでね、ここ〔質問表〕に書いてあるアジア局と北米局の確執じゃ

ないですよ。当時のね、情報企画部。情報企画部ってのはね、アメリカ側のINRとね、それとPolicy Planning Staff、それとあとはExternal Researchつまり学者とか研究所との連絡、それとPolitico-Military それを一緒にしたのが情報企画部だったんです。いまはそのうちの情報部門だけがINR的におおきくなちゃって、他は総合政策局にいきました。アメリカとのpolicy-planningは私がやってたんです、毎年毎年の。アメリカってカナダいったら、その時カナダが承認してましたから、69年か8年だと思っんです。それでね、まあ結果から申しますと、情報企画部は台湾派だったんです。現状維持派だったんです。中国課とアジア局は日中正常化派だった。これで、もうものすごい喧嘩になったですね。中国課ははやく正常化、正常化っていいましてね、カナダのあと。それであんまり喧嘩するもので、あっちこっちで大臣がとりまとめようとして会議やったりしましたね。一つの会議は新聞に出たと思いますけども、台湾大使と香港総領事と中国課長と企画課長と、これ加藤吉強って人ですけどね、亡くなった。この四人で台湾会議をやった。

村田 中国課長はどなたでしたか。

岡崎 橋本。これはもうね、昔から私と橋本ってのは顔をみると馬鹿野郎の言い合いだったですね。まあ、こんなこと言う必要はないけども、赤坂で飲んでましてね、それで話してるうちに馬鹿野郎の言い続けになってね。それで橋本がトイレに行っただんですよ。そしたら芸者さんが集まってきてね、岡崎さんね、橋本さんが帰ってきたら、手をついて謝りなさいって。いくらなんでもね、先輩にね、ああいう言葉使いをして通るはずがないって。あいつはね、私よりも年はいくつか上だけど、入省は1年下なんです。それで、あんな粗末な先輩があるもんかってね。悪口をさんざんいってる間にトイレから帰ってきてね、また喧嘩ですよ。だけど、結局仲よかったですけども、会えば喧嘩してね。一時大喧嘩してる時に内調と警察も一緒にいて、あとで外務省も捨てたもんじゃないっていつてくれた。

村田 情報企画部が台湾派だった主要な理由ってのはどういうところにあるんでしょうか。

岡崎 あのね、それはね、まあ個人の考えもありますけど、中国課が中国派なのは当たり前でしょう。それで省内でね、省内は縦割りですからね、地域局のすることに批判するところはないんですよ。アメリカ局はアメリカのことをやってりゃいいんでね、中国のことに口出しちゃいけないんですよ。ところが、初めて情報企画部みたいなものができまして、どこにでも口出していいってことになったんで、これはね、相当な権限争というか喧嘩があったんです。それで、下田さんが次官やって、その次牛場さんが次官やった。二人とも非常に保守的な人でね、下田さんの場合は台湾独立論だったですよ。私はその意向を受けたことがあります。それ以上言うところちょっとまずいですけども、下田さんももう亡くなってますしね。50年したらきっとそれが出てくるでしょう。

五百旗頭 でも、それならもうわりと知られてるんじゃないんですか。下田さんも

わりとはっきりおっしゃる方だから。

岡崎 ええ。それで年がら年中喧嘩してたんです。喧嘩してる最中に私はワシントンへいっちゃった。ワシントンって、それが71年の2月。それで7月のあのニクソン・ショックですからね。

五百旗頭 機関の立場を代表した戦いであると同時に、やはり外交戦略とかあるいは国際情勢の推移の認識を。

岡崎 そうです。というか、結局アメリカ局はアメリカのことはするけども、アメリカがこう考えてるからといって、中国課とは喧嘩しないんですよ。昔の伝統でいえばね。縦割りですから。縦割りを崩す目的で情報企画部を作った。だからそれはものすごい抵抗があったんですよ。それで喧嘩してる最中に私がいなくなっちゃって、残りが守ってるうちにニクソン・ショックがきちゃったんで、それでもうガラガラになっちゃったんです。

五百旗頭 ニクソンのゲーム・ドクトリンってのは大して注目なさらなかったんですか。

岡崎 いや、注目しましたよ。注目しまして、あれは日本の政策にどういう影響を与えたかな。ただ、あれはベトナムなんで、ベトナム撤退だと思ってましたからね、そうでしょう。あれは要するに、条約上のコミットメントのない国が通常兵力で脅かされた場合は、通常兵力はその国が出すべきだと、そういう話でしょう。

五百旗頭 そうすると、アメリカがアジアから全般的に後退していくとか、そういうものでもないんですか。

岡崎 それはね、もう少し遡ってね、68年のジョンソン声明、その時に私は分析課長してて判断を誤ったんです。アメリカは勝ってると思っていた。まあ事実勝ってたんですけどね。それで、その時は私の分析にそんなに強い反対もなかった。やっぱり中国課ってか、外務省でも保守反動でないという立場の人いますけどね。

五百旗頭 進歩派っていたんですか、社会には多かったですけど、外務省の中にも。

岡崎 中国課長なんかそうですよ。それで、それお前はまちがったというんで、こりゃあ、参りましたってことで。

五百旗頭 つまりジョンソン声明の前にそういうことはない、岡崎さんはおっしゃってたんですか。

岡崎 要するに、毎月毎月情報分析して、アメリカの地位は着々とよくなってると思っていた。そりゃあ、10万から50万に急に増えたんですからね。そりゃあヴェトコンの方は追い付かないですよ。その間アメリカはどんどんよくなったんです。テト攻勢だってね、今ではいってますけど、テト攻勢が出たとたんに、ありゃあチャンスなんですよ。あれで隠れてたヴェトコンがみんな浮かび上がったんだから。あれを全部潰しちゃうとね、スケジュール10年ぐらいのびているんですよ、もう一度組織再建するの大変ですからね。

田中 今はねテト攻勢はベトナムの側からみると大敗北だったという意見が強い

ですけどね。でも、あの時はアメリカの側のショックを受けたのが、とてつもなく大きかったですよね。

岡崎 アメリカの国内にショックを与えましたからね。それで、ジョンソン声明が出てしまった。これでもうヴェトナム撤退は既定事実ですからね。その延長線ですからね、グアム・ドクトリンてのは。

田中 ニクソンが大統領になる前に*Foreign Affairs*に書いた論文でのはけっこう有名で、その後あれがニクソンの中国政策転換の一番のシグナルだったということをキッシンジャー等いってますけど、そういうのはその当時どういう。

岡崎 もっともキッシンジャー自身がいってますけども、あれをいった後で北爆したんです。あれをいってワルソー会談を再開して、その後で北爆したんでワルソー会談やめちゃうんですよ。だから、それで一つのストーリーが完結したと思ってたわけだ。それとね、結局ね、情報とか調査ってのは戦後30年いつもそうなんですけども、いわゆる敵性情報なんです。共産主義国分析なんです。ソ連、中国、北朝鮮、北ヴェトナムなんです。友好国の分析ってのは考えなかった。ニクソン・ショックが来てからね、情報調査部とかみんな調査関係はね、アメリカ分析を置くようになった。それまではアメリカ分析してないんだから。それは大きな変わり目ですよ。

村田 71年2月にワシントンにいらっしゃるわけですが、その時は参事官ですか。

岡崎 はじめ一等書記官で、それから参事官です。

村田 その時の駐米大使はどなたでしょう。

岡崎 牛場さんです。

村田 いかがでしょうか、漠然とした質問ですが、その頃の大使館と本省とのコミュニケーションはうまくいってたんでしょうか、それともギクシャクしてたんでしょうか。

岡崎 いや。問題はね、ニクソン・ショックがおこった時に牛場さんと一体どうしてこうなったんだというので考えましたらね、約1年間、外務大臣と国務長官がまともに会ってないんです。最近じゃあ考えられないことですがね。前の年に佐藤さんが国連30周年かなんかで国連に出て、帰りにちょっとニクソンに会ってますよ。ですけど今じゃ考えられませんが、ぜんぜんわかんなかった。しかもね、確かにすべての公開情報からみて米中が進んでることは見えてましたけど、大使館からはそういう情報はいってなかった。私はね、キッシンジャーがパキスタンの旅行に出かけるほんの3日ぐらい前にね、経済一等書記官から情報に移ったんです、情報文化に。それまで経済やってた。これ縦割りですからね、経済やってる人間が政治のことに口出しちゃあいけないから、私も全然知らなかった。分析もしてなかった。経済の勉強だけやってた。それでね、情報になったとたんにはね、今まで遠慮してたけど、昔の仲間会いにいった。昔の仲間がね、まさきに会ったのがジョン・ホールドリッジ。キッシンジャーについて北京入りした男です。それが私が分析課

長の時に INR の北東アジア担当やってた。カウンター・パートだから。だからこれで情報関係になったから自由に動けると思って、真っ先に挨拶にいった。そしたらね、ものすごい真面目な顔して、これから重大な旅に出かける。ただしね、昔の友達はいっさい見捨てない、詳細はねカンサス・スピーチ読んでくれればわかる。ニクソンがね、その1週間くらい前にカンサスでスピーチやった。それを聞いてね、カンサス・スピーチさらっと読んだけど、ふるい友達ってのはヴェトナムのことだと思った、もちろんね。それでね、報告しようかと思ったけど、初めての挨拶でしょ。ホールドリッジってのはね、どんな事でもものすごくまじめな顔して大袈裟なことという男なんです。ふだん会っていれば、その日に特別の情報をくれたこともわかるんですがね。その時は仕事を始めたばかりで「大ニュース」「大ニュース」というものはばかれた。だからね、どうかなと思って報告もしなかった。今となってカンサス・スピーチ読んだら本当に書いてあるね、米中政策のことが。カンサス・スピーチってのは是非とも読んでください。その分析もしてなかったのね、大使館は。だから大使館からの報告はないんです。後で僕が急いでカンサス・スピーチって大使館の中で大きな声出してね、みんな読めっつていえば、政務ずっとやってる人は多分気がついたにちがいない。縦割りでね。あれ本当にご覧になればあきらかにわかります。それをいうが早いかわらは旅行しちゃって、パキスタンから入った。

田中 4月か5月に東京のピンポンの話がありますよね。ああいうのは岡崎さんの場合は経済やってたから、あんまり注目してるという話じゃなかったんですか。

岡崎 そうなんだ。注目しなかった。ピンポンやって、それからアメリカでもずっとピンポンやってたんだ。そりゃ経済だったからね、しまったんだなあ。

五百旗頭 でも、その時点でピンとこられたわけね、カンサス・スピーチをご覧になって。

岡崎 いや、さっと見たんだけど、こっちも新しい仕事に着いたばかりだし。やっぱり未熟だったんですね。アメリカの政策ってのはね、演説読めばわかるんですよ。それがね、わかったのはニクソン・ショックの後なんですよ、日本の外務省は。特にキッシンジャーの場合は読めばわかるんですよ。キッシンジャー自身ブーブーいってますけど、いろんな外交白書出したでしょ。ちゃんといってるのにね、誰も新聞は関心もたないって。要するに、通り一辺のことをいってるにちがいないと思ってるから。分析して読んでればわかるように書いてあるのに誰も読まないって。

田中 でもそれは日本外務省だけがわかんなかったわけじゃなくて、世界中がわかんなかったわけですよ。

岡崎 もし今ならね、カンサス・スピーチ来たらいっぺんでわかりますよ。線を二三本引いて、これなんだ、これなんだって、あちこち電話しまくれればね、もうすつとわかってきますよ。その技術を私自身が開発したのが、次に防衛庁の参事官いっ

てからですね。それまでは日本にその技術なかったですよ。

村田 この段階では、よくいわれるように国務省のマーシャル・グリーンなんかも全く知らなかったわけですよ。

岡崎 極東次官補ねえ。ロジャーズが長官でしょ。それで次官がだれだっけ。

村田 ジョンソン。

岡崎 そうそう、アレクシス・ジョンソン。ジョンソンはね、牛場さんの回想によるとね、あいつは正直な男だなあって。時々会うとね、困ったなあ、いけないことがあるって、そればかりだった。アレクシス・ジョンソンはね、僕が牛場さんの下でね70年安保対策をずっとやってる時に本当に仲間だった。駐日大使で。今度牛場さんが駐米になったら向こうが次官になった。だから牛場さんとジョンソンと私ってのはしょっちゅう連絡してたんですよ。まだ生きてるとは思いますけどね、立派な人でしたよ。

五百旗頭 沖縄20周年の行事にも来てくださって、その後ちょっと動かなくなっ

て。  
田中 当日の話ってのはかなりいろんなところに、ニクソン・ショックの当日の話ですけど。牛場さんはゴルフにいつてらっしゃったという話じゃなかったでしょうか。

村田 パーティーかなんかで連絡がとれなかった。

岡崎 僕はなにがなんでもすぐ来いというので、牛場さんとこ飛び込んで、牛場さんの部屋にいて、私しかいなかったのか。ほんとなら木内とか村田がいなけりゃいけないんだけど、やっぱり出かけてたんでしょ。それで東京に電話したんですよ、楠田さんのところにね。それはもう牛場さんが伝えた後ですけど。

村田 それでいわゆる3分前ってことになるわけですよ、佐藤総理が知るのが。

岡崎 そうそう。まあそれまでがニクソン・ショックですよ。しかし、まあそれから後がすごかったなあ。私が残していった情報企画部なんてのは袋叩きですからね。アジア局がいばって。それでもう、みんな泣いて手紙を書いて来たですよ。それから今度ははいよいよ中国代表権問題。今度は私は、中国代表権問題は私はこれはジョン・ホールドリッジに会いに行った。それでどうなんだと聞くと、いやそりゃあ台湾は絶対守ると。日本はなんだって、どうして中国にああなんでもペコペコするんだってね。今度はそれをすぐ東京に電話した。それで東京都ニューヨークの台湾派は勇り立ったといいますよ。それでね、東京も腹が固まって例の逆重要事項指定、あれで腹をきめたんです。それをやったのが法眼次官ですね。当時の政務審議官ですよ。法眼さんって人はね、昔からね、ニクソン・キッシンジャーと同じで、中国を仲間にとりこんでソ連に対抗しろという議論で、昔からそうなんです。私が課長の時に彼がウィーンの大使の時、泊まり込んで太いに議論して、結局お互いに議論を譲らなかったですけどね。それで今度は日本にいる時は、私と橋本の両方の意見をかわるがわる聞いたんですよ。それで私は台湾擁護論で。法眼さんは今

記憶がなくなっちゃったけど、法眼さんをまず政務審議官にした。これはね、別の人を審議官にするはずだった。法眼さんは辞めて外に出るっていったんです。それをなにがなんでも法眼を入れろって言って次官にまでしたのは、結局素心会ですよ。素心会てのは白い心ね。これは要するに岸信介、賀屋興宣。佐藤内閣を通じて隠然たる力があつた。福田派とかそういうところにね。素心会はもちろん台湾派ですからね。だから私が説得したわけじゃないかもしれませんが、台湾守ろうということになった。ただ法眼さんがいったことはね、台湾には義理があると。ここでもう100%働いて、義理を返すんだと。義理をすませたら日中復交だと。それが彼の意見だった。そしてその通りやったんです、彼は。それでそういう考え方になるには、今度は私がいなくなっちゃって橋本が付いてたことがあるんです。私と橋本がまあ子分みたいなもんだつた。それで逆重要事項指定やって、あれは確かに力戦奮闘したんです。それで敗れて、しかもね、あれやってる最中にキッシンジャーがまた中国にいったんですよね。それでかなり崩れたんですね。逆重要事項の指定を国連総会で討議してる間ずっとラジオ聞いて、牛場さんとこで聞いてましたよ。その時も牛場さんと二人きりだったな。

村田 大使館で他に情報分析をやるようなポジションはなかったんですか。

岡崎 情報分析なんかしてないですよ。それは政府がやるんです。政務が木内参事官、木内の後が村田参事官。

田中 ちょっと前後するんですが、日中てことを離れて日本の安全保障てどこから考えた時に、ニクソン・ショック前後ということで、中国に対する認識ってんですか、日本の中のね、はどんな風だったと考えればいいんですか。中国脅威論みたいなことを民間でいう人はいたと思うんですけど、中国てのは日本の安全保障にとってみると、文化大革命からニクソン・ショックぐらいまでの段階ではどんな位置づけだったんですか。

岡崎 ニクソン・ショックの後は中国脅威論はゼロです。まったくなかった。その前に例えばね、下田さんですね。文化大革命の頃に日本の学生が騒いだでしょう。あれは中国がやったんだと。中国が日本に間接侵略してるんだってね、いつてましたよ。これは新聞に出るまでいわなかったですけど、我々を相手してる時はいつもそういつてましたよ。その次は牛場次官。牛場次官はああいう人ですからね、保守的なひとですからね。だからもちろん共産党ぎらい。ところがそれから日中正常化になるんですけども、あその前だ。だからまだニクソン・ショックの前に古井喜美なんて一生懸命日中正常化やってたでしょう。それで北京にいつて日米安保条約はなんかアジアの平和を害してるというコミュニケを書いたでしょう。あの頃、僕は愛知さんとよく会ってましたからね、今日古井が来たよってね、部屋の遠くの隅に立ってね、本日は謝罪に参りましたって言ったって。それで日米安保条約は日中共同の敵、アジアの敵かなんか、そういうことを重視すると言ってしまった。で大臣室の一番端に入って深々と頭を下げてきた。そういわれちゃ、しょうがないから、



まあいいよっていったって。

田中 中国が原爆作って以後の、中国に対するそういう軍事情勢的な分析ってのはどの程度のものがあつたんでしょうか。今から思うと別に中国にその当時日本をです、直接的に侵略してくる能力があるようにはみえない。

岡崎 いや、私は分析課長の時、ポリテイク・ミリタリーやりましたからね。あの頃はアメリカからCIAが来て、それで中国の核開発、それからミサイルの能力を分析してましたよね。今から思えば、かなりの過大評価だったんですけどね。要するに、液体ミサイルで液体入れるのに二日もかかるようなやつをね一本作つたとか、そういう話ですからね。しかし、その距離からいくとどこまでとどくとかね。

村田 そういうのはあれですか、防衛庁ともジョイントでやるわけですか。

岡崎 それがね、もう当時はね、防衛庁ってのは全く人格認められてなかった。防衛庁がCIAと接触したなんてもし新聞に出たらね、もう袋叩きにあつてとつても身動きできなかった。それでCIAは外務省に来てブリーフィングをして、それで防衛庁呼ばなかったでしょうね。とつたメモを向こうに回してる。

田中 過大評価ではあつても、ある程度は中国は日本の安全にとって脅威になるという風に思われてたんですか。それともやっぱりあるとしても間接侵略ですか。

岡崎 間接侵略と思ったんでしょうね。それもね、文書はないでしょう、おそらく。文書は一つもないと思う。ましてニクソン・ショックの後は本当に地をはらつて中国の脅威を言う人は一人もいないですからね。だってね、結局あれですよ、ニクソン・ショック後だつて、藤山さんが訪中して、その時に藤山さんが帰つていったことは、安保廃棄は日中正常化の入り口である必要はなくて出口でいい。日中正常化すれば自然に安保廃棄につながるんだ、それでいいんだと。それを聞いて日本国内がどつと動いちゃうんですよ。それだつて私としては憤懣やるかたない話でね、結果として安保条約がなくなつたらどうしてくれるんだつて話ですよ。だけど、それじゃあ廃棄しなくていいんだなんてことで、どつと動いた。ただその頃からね、社会党がいつても公明党がいつても、安保反対を共同声明に入れなくなつたね、中国は。それで社会党も本当に困つてきたんですよ。そういうことがある。

五百旗頭 泣きついて入れてくれっていいましたですね。

岡崎 そうそう。それでね、まったくけしからんことになった。あまりにひどいから文書はないでしょう。文書があつてももう捨ててるかもしれない。日米安保の軍事面をなくすという話なんだ、軍事面を弱める。より穏健なものにする。それをね、外務省の中でもはじめたんですよ、作業を。それを牛場さんがもう怒鳴り散らしてね。

田中 それはニクソン・ショックの後ですか。

岡崎 あと。

村田 それは北米局がやつたんですか。

岡崎 それはちよつといえないですね。

五百旗頭 民社党なんかの議論ですか、有事駐留にするとか。

岡崎 有事駐留は民社は60年代からでしょう。とにかく、それで安保条約改定論ってのが随分あったんですよ。それでね、エリクソン日本部長がね、お前にいったってお前はわかってんだからしょうがないけども、とにかくけしからんと。無理だ。彼にいわせるとね、日米安保条約ってのはね、細いゴムをもってきてぎりぎりに伸ばして先を結んであるもんだと。一度切ったら元に戻らないよと。どういうことかっていったら、アメリカは相互性がほしい。日本は軍備のこといわずに経済のことばっかししてたでしょう。こう引っ張ってここで結んであるものをね、そんなもの改定なんて切ったら絶対結べないんだって。今あるんでぎりぎりだって。これエリクソンが言ってましたよ。これは引用していいでしょう。

村田 今のお話でエリクソン日本部長とかですね、あるいはホルドリッジとか名前が出ましたけれども、先生ワシントンにおられてご覧になってる範囲で、ニクソン・ショックのあとのワシントンの日本専門家と中国専門家ってのはどうなっていたんでしょうか。日本専門家はやはり危機意識をもってましたか。

岡崎 エリクソンは困ってましたね。そりゃあジョン・ホルドリッジなんかは意気揚々ですよ、今や出番ですから。あの時はホルドリッジの下がディック・ソロモンだった、後の極東次官補になった。

村田 ウィンストン・ロードもいましたですね。

岡崎 いたんでしょうね、ああいたいた。うちに来た、奥さん連れて、あの中国人の奥さん連れて。

村田 日本専門家はあれですか、なんか疎外されてる感じですか。

岡崎 専門家はあの時エリクソンしかいなかったんだな。エリクソンの他は誰だったかな。名前忘れたけども香港総領事やったね、日本の一等書記官か参事官やって香港総領事にいった人がいたでしょう。日本の公使やった。

村田 デビッド・オズボーン

岡崎 オズボーン。オズボーンは中国語ですけども、あれは日本が好きだった。それでニクソン訪中があって、その後田中訪中があって。オズボーンはね、日本がいきすぎた分を少し元に戻して、アメリカがいかなかった分を先に進めてね、日米共同歩調に戻そうってことを言ってましたよ。でも、当時日本は全然そんなことは問題にしなかった。アメリカがなにいうって。もうものすごい反米、要するにキッシンジャーが裏切ったって。

五百旗頭 田中時代ですか。

岡崎 そうそう。

五百旗頭 田中内閣になって、ハワイでまずニクソンと会いましたですね、北京いく前に。あの時も、柳田邦夫さんなんか書いているのによると、キッシンジャーがいろいろいったんだけど、台湾守ると。日本はそれについてフリーハンドだといって追随しないということをついたんだという風な。

岡崎 いや、そこまでははっきりいってないですよ。牛場さん、これメモワールにもかいてますけどね、田中さんはいってね、今度はいったからといって向こうのいうこと一々聞かないよと。一度もち帰ってくるんだ。それでキッシンジャーはもち帰って協議してくれると了解した。そしたら向こういって決めちゃった、そういう話ですよ。牛場さんは、私に話したし、あれに書いてありますよ、あれはとにかくね、いまだに私はキッシンジャー許せない。ニクソン・ショックまではアメリカと日本の政策ってのは本当に一致してた。占領時代からね。それで中国スクールとか古井喜美とか一緒になって、対米追随だ、変えろ変えろっていうのを、牛場さんの下で大会議やって、もし日本が中国側にいったらアメリカからどういう目にあうかわからないってことをずっと説明して、断固守ったのが牛場さんなんです。それでずっと守ってきたら、キッシンジャーが先にいっちゃったわけですよ。それからあとの反米、こりゃすごかったですよ。ちょっと想像できませんよ。

五百旗頭 それは外務省内で。

岡崎 まず日本全部で、マスコミ全部で。外務省中もそうですよ。外務省、結局牛場さんと私だけになったですよ、大使館でも。

村田 外務省の中でも、例えば、大使館が体面を失うってか、なんでこんなこと気付かなかったんだってことで、信頼を失うってことはなかったんですか。

岡崎 そりゃ、僕はワシントン側にいたからわかんない。牛場さんてのはこわい人でね、そんなこといったらどなられますからね。

五百旗頭 佐藤首相はあれを沈黙をもって耐えてね、その後やや。しかし彼と堀さんもはじめは怒って、それなら先に日中やろうじゃないかって。しかし、堀さんも福田さんも、”アヒルの水掻き”とかなんとかうまくいかなかって、それで結果的には佐藤政権の間は鎮まって、ということだったんですか。

岡崎 そうそう。

田中 これで日中国交正常化した。その後アメリカからみて日本はどういう方向で、さっきおっしゃったように日米安保をモデルにしようなんて意見が出てくる中で、どうしたらいいという風にお考えになってましたか。

岡崎 というのはね、アメリカ側はね、キッシンジャーがその後国務長官になる。キッシンジャーって人ははっきりいって反日ですからね。だから、そこから先は日本が相手にされない時代が続いたといっているいいでしょう。牛場さんはクビになっちゃったり。牛場さんはクビですからね、はっきりいって。私に言いました。電報が来た時に、おっ、俺クビになったぞって。帰ってからね、僕に全部話してくれましたけどね、大平さんとこいって、どうしてクビにしたんですかって聞いた。官邸がうるさいからって。それで田中さんとこいって、どうしてクビにしたんですかっていったら、いや外務省がクビにしろっていうからって。その後、結局、私はいくところないから、韓国に逃げた。

村田 その韓国へいらっしゃったというので、73-76年にソウル勤務でらした

と思うんですが、どうでしょう、ソウルからご覧になると日米関係や日米中関係の様子がまたちがってみえたということは。

岡崎 とにかくね、今では想像できないことがありますよ。日本の新聞はいんちきなんだよね。あの時読んだ記憶のあるの搜してもみつからないの。おそらくね海外にいと一番早い版が来ますからね、早い版ってのはかなり刺激的なことを書くのね。それで最後の保存する版になるとね、危なくないもんになるんだ。これはずるいんだな。それであの頃ね、館員は全部ね、台湾切ったあとは韓国だと、そして岸・佐藤時代のね、韓国・台湾優先の姿勢を正すんだと。私はだからあの時、本省に向かってね、韓国に対する姿勢を正すという言葉までいう人間がいるは遺憾だと言ってみてやりましたよ。それきりね、いう奴いなくなっちゃった。そんなね、今から考えたら想像できないですよ。韓国と国交切るにちがいない。金大中事件があったから。主権侵害するような国はね、国交断絶すべきだという議論があつて、大使館がなくなっちゃうってね、大使館の連中がみんなパニックおこした。僕は冗談じゃないっていつてね、台湾は負け戦だったけど、韓国はどうみたって勝ち戦なんだ。がんばったら必ず勝つんだからっていつて、みんなを叱咤激励したことがありますよ。また、いらんことが次から次から起こつてね。金大中があつて、それから今度は早川・立川事件があつて、日本の学生の左翼の運動ですけどね。それから例の朴大統領夫人暗殺事件。それでもう、まあ、あれは日本がむしろ悪かったから、それ<sup>どう</sup>にか収まったんです。

村田 駐韓大使はどなただったでしょう。

岡崎 後宮大使と西山大使。私はもう攻撃に対しては反対攻撃でね、日本と韓国の間にはまだ通商航海条約がない、通商条約をつくれって意見具申をばんばん送った、反対論を無視して。こりゃ必ず勝ち戦ですよ、負けるわけないんだ。あの頃はみんな台湾の次は韓国切りに来るって。

村田 これは日韓に国交のない時期ですけどね、日韓国交正常化の話が14年も長引きますよね。その間にケネディ政権なんか日韓双方に歩み寄りの圧力をかけてる。仲介役のような形で。いまおっしゃつた70年代の日韓関係がぎくしゃくした時期に、そういうアメリカからの圧力とか仲介みたいなものはなかったんですか。

岡崎 65年に日韓正常化は椎名・赤木でやったんですね。佐藤政権でしたから。それで、ありとあらゆる条約・動議をみんな強行裁決した。ありとあらゆる動議ですよ。手続き動議。閣僚一人一人について罷免動議する。それ優先だから。それを全部強行裁決でもって片付けて、動議が全部なくなってから通した。ものすごい国会運営だった。それで通しちやつて、それからあとの金大中までが佐藤政権の下で、日韓議連が岸、賀屋ががっちり後ろについて、それは”チョアチョア時代”ですよ。”チョア”てのはグッドですけどね。日韓のハネムーンです。当時は私がいつた頃だって、仕事はみんな日本語ですからね。だからまったくの戦前の日本を知つてる人を通してね、日韓関係が一番いい時代。私がいつた時にそういう事でアメリ

カがね、仲介しようとした。あ、その時にいた奴がね、エリクソンが公使で来てたんだ。で、エリクソンが日韓の間をもとうとして、試案を出したな。それがまた、今じゃあ考えられないけれど、日韓関係にアメリカが口を出すとはなんだと、エリクソンは馬鹿な奴だと。馬鹿ってのは、本当に馬鹿呼ばわり、東京いくとね。で理由聞くととなんでもないわけね、日韓関係にアメリカが口を出すとはなんだって、そういう勢いなんだ、省内でね。

田中　すると全般的な雰囲気は、ニクソン・ショック以後しばらく、日本は外務省も含めてかなり反米という感じですか。

岡崎　そうそう。

五百旗頭　外務省は十分そうでないというイメージだったと思いますけどね、社会全般あるいはマスコミとかに対して。まあ、橋本さんたち、あるいは中江さんのアジア局とかはね。でも、外務省全体はやはり対米基軸派が、条約局だとかアメリカ局中心に。

岡崎　ええ、情報調査局はがんばってました。

五百旗頭　岡崎さんいなくなってからも、がんばってたんですか。あとどなたですか。

岡崎　加藤吉彌よしひろです。彼が一人でがんばってた。

五百旗頭　条約局もそうでしょう、高島さんとか栗山さんとか。

岡崎　安保条約を見直すとかね、モデレートにするとかね、そういう作業が結局条約の仕事になった。

田中　それ派しやでもあれですか、総理、田中角栄って人の、彼の外交観ってのをどういう風にご覧になってました。

岡崎　彼はね、彼自身は保守的な人物だった。けども、マスコミが反米ナショナリズムの英雄みたいに書立てて。彼自身は全然そんな人じゃない。ただ、そういうムードとか騒ぎに乗ってただけの話だ。それが権力に転化すれば彼にとって得だから。

五百旗頭　中国は従って決意もってやる、それから今度石油危機がおこった時にアラブ寄り外交にね、キッシンジャーが制止するのにやりますね。あの辺から、田中さんはかなりその自主外交的になってきたんじゃないですか。

岡崎　あの頃はもうアメリカのいうこと聞く気ないですから。特にキッシンジャーのいうことはまったく聞く気ないですね。

五百旗頭　やり返しましたですね、キッシンジャーがやるなっていったら。アメリカが保証してくれるのか、石油供給をって。

田中　そうするとあれですか、岡崎さんの記憶の中でいうと、日米関係ではあの辺りが一番反米的ですか。

岡崎　そうですね。油については、これまた個人の話けども、ワシントンから韓国いく間、ほんの一週間ですよ。もうすっかり決まってるわけ。浅屋さんが人事

課長でね。お前そんなね、韓国なんかいくなよって。東京にね、課長ポストがあるから、今からでもやめちまえて。そのポストがね、まさに石油ショックの真っ只中、10月の10日頃ですけどね、中東課長やれって。私は逃げたですけどね、牛場さんクビにした内閣の下で働けないからって。

五百旗頭 田中さんは保守的であって、例えば、中国いく前にハワイ寄るんだと、手順を尽くすんだと、ということを主張してた。しかし、キッシンジャーの裏切りもあるから、なんでもいうこと聞くわけじゃなくて自由を留保していくと。それは田中・大平いっしょだったんですかね。

岡崎 大平さんはね、わりあいとかっこつけてる人だから。マスコミとかインテリに対して理解するとか進歩的だとかいうのをみせるのが好きだった。田中さんはそんな気全然ないから。

五百旗頭 アメリカの力っていうのをちゃんとみると。

岡崎 アメリカの力をちゃんとみてるのでさえもないですよ。国内情勢でこれだけみんな騒いでるんだから、やったら得だってことでしょう。

田中 なんか国際政治自体についてですね、

ある種の見方ってのはあったんですかね、田中角栄に。

岡崎 唯一つ個人的に記憶があるのはね、朴大統領夫人が殺されて、その後の弔問に田中さん来たでしょう。弔問に田中さんが来てね、大使がね、こりゃまあ台湾と韓国はまだ国交があるから、台湾と隣になるかもしれませんよってなことをいった。すると、だから俺は来たんだ、だから来たんじゃないかって、いってましたよ。台湾とそれつきり会話してないから、話するために来たんだって、そういってましたよ。そういう人ですよ、あの人。だから、なんとなくイメージでマスコミが担ぎあげて、それで別に担ぎあげて文句いう人でもないですよ。

五百旗頭 そのあと彼は資源行脚を世界中やりますね。あれに対してはアメリカは相当神経質になったんですか、虎の尾を踏んだとか。

岡崎 結局、中東和平のプロセスを害するということですよ。アメリカは中東和平ばかりやってましたから、要するにPLOを押しえこんで和平をしなきゃいけないのに、PLOを勇気づけるようなことをやってるわけですからね。

五百旗頭 日本の自主外交、いままで一番反米・自主的であった、その外交に対する不安という風なものでは。

岡崎 それはあるかもしれませんがね。それはだって、ワシントンにいた時からエリクソンがぎりぎりにつないだゴムをどうして切るんだって、そういう時代ですからね。

五百旗頭 資源の自立の次は軍事の自立かという風な危惧はどうですか。キッシンジャーはショックでね、日本が少しは自立すればいい、依存いいかげんにすればいいと思ってたけれども、それをやってみたら、ショック与えたら、思ったより早く日中もやったしね、思ったより自主に振ったってことを私聞いたらいってましたで

すね、沖縄返還のインタビューした時に。

岡崎 あれはでも、私はキッシンジャーは失敗と思うけども。キッシンジャーはもともと日米を疎遠にさせて米中との距離を調整しようと思ったんなら成功でしょうけどね。

五百旗頭 繊維の問題で佐藤内閣がなかなかちゃんとやらなかったから、それに対する。

岡崎 そうそう、ニクソンがね。沖縄返還の時の佐藤・ニクソン会談でね、佐藤さんが善処するって言って、それを通訳が間違えたっていうレジェンドになってるけど、違うんですよ。もっと踏み込んで約束したんですよ、あれは。

五百旗頭 それは若泉さんなんか。

岡崎 さて、それは。

村田 今ちょっと若泉さんのお名前が出たからあれですが、これは沖縄の時の話ですが、あのご本は先生お読みになりましたか。

岡崎 ええ、読みました。

村田 どういう風にお読みになりましたか。当時の先生のご記憶に照らせば、あながちおかしい話でもないですか。

岡崎 あながちおかしい話じゃないですけどね、僕はあれについてね、あっちこっちからコメントしろといわれてね、コメントしてないんですよ。どうしてかっていうとね、その後20年近く彼沈黙してたでしょう。最後に会った時にね、ちょっとなにいつてるかわかんなかったな。あんなことがあっても、ちっとも不思議じゃないとは思いますが。でもあの頃感じでは何とも言えません。

村田 外務省サイドからご覧になって、若泉さんが佐藤総理の密使のような形で別ルートで接触してるってことは暗々にわかってたわけですか。

岡崎 そりゃあ僕知ってます。たった一回ですが、牛場さんについてね、キッシンジャーに会いにいて、我々が待合室にいて、それでしばらく待ってから入ったら、どこから入ったのか知らないけど、二人でいましたよ。

田中 ただ、あそこで写真に出てる文書がありますね。あれは若泉さんと佐藤総理とキッシンジャーとニクソン4人だけもってるというか。

岡崎 写真ありましたっけ。

田中 写真は表についてますね。

村田 あれでキッシンジャーはかなり怒ったらしいですね、自分の名前の入った写真を許可なくあそこに載せたってんで。

岡崎 それが本当に、4人の署名が入ってんですか。

田中 署名は入ってないんですよ。あれだとただの原稿なんです。

岡崎 そこでね、そっから先がわからない。

田中 これはでもあれですよ、日本政府はないと言ってんですか、外務省は。

村田 一私人の見解であって、外務省の認識としては、そんな密約はなかったって

ことでしょう。

岡崎 まあ、そういつてるでしょうね。

五百旗頭 ああ、そういうコメントあったの。

村田 ありました。

五百旗頭 どこで。

村田 あれはわりと早くやったんじゃないですか、外務省の記者会見かなんかで。

田中 その辺でちょっと、昔の話でその辺のことなんですけど。これは別にいつてかまわないと思うんですけど、この間、西広さんがお亡くなりになる前にインタビューしたんですよ。その時にいわゆる韓国・台湾条項の前後で、防衛庁の中で有事の研究をしたっていう風におっしゃてるんですよ。それでいろんなケースを想定して、この時にどうするってんで、それは佐藤総理にそういう話しをする前に外務省に渡したっておっしゃってるんですよ。そのあとどうなったかわかんないって、おっしゃってるんです。

村田 国際担当参事官がもって。

田中 そう、それを外務省にもって帰って、そのあとどうなったかわかんないって、彼はおっしゃったんで。ただ、その時あった検討でだいたい今の事態でもすべてカバーできる検討をやったつもりだとおっしゃってるんです。そういうのはご覧になったり、検討されたことってありますか。

岡崎 それはね、私見てないと思うな、沖縄返還の時の文書でしょう。

田中 そういのがあったってことはありますか。

岡崎 もちろん、あったでしょう、当然。

村田 ただ、あの時の西広先生のお話ではね、防衛庁長官、次官を含めた首脳会議にかけたら、これを防衛庁の公式見解とされるのは困るというので。多分、国際担当参事官が外務省に渡されたんだろうと。

岡崎 なるほど。

田中 ただ、そういうのがあった時に、どのくらい上まで日本の政府の中ではいくんですかね。佐藤総理はご覧になって。

岡崎 佐藤総理にはいかないでしょう。安保課長、アメリカ局長まででしょう。

五百旗頭 楠田さんにもインタビューされたんでしょう。

田中 楠田さんは私知らないって。

岡崎 官邸にはいかないでしょう。

村田 最後に防衛参事官時代のお話を簡単に是非伺いたいんですが。

岡崎 それはね、ガイドラインはね、私のいく前に大きな話はできてた。あれは、あの時の大臣はだれだったかな。

村田 坂田道太。

岡崎 そうそう。あれは社会党の質問かなんかを逆手にとったんでしょう。あの時は僕いなかった。いった時にはもう交渉が始まっていて、技術的な話しになってま



した。だから、あれは一種の有事研究みたいになったんですよ。

田中 その時は、以後ガイドラインの研究だと安保条約5条それから6条事態の研究ということで、うかがってる限りは5条の事態の検討はけっこう進んだけども、6条事態の検討はあんまり進んでいないという印象があるんですが。

岡崎 私は情報ですからね、防衛じゃないから、横で聞いているだけですけども。5条が済んで、6条はだいたい防衛庁の関心事じゃないですからね。外務省の関心事ですからね、適当に作文でごまかした記憶がありますけどね。

田中 そのあと外務省は6条の件についてはどうなったんですかね。あんまり進まなかったというのが、周りの印象ですけども。

岡崎 進まなかったというより、あんまり進めなかったんでしょうね。6条ってのは外交問題の話ですからね。だけどあの時の太平洋軍と防衛庁の関心は、有事の際にどうやって共同行動するかですからね。しかも、あの時期になるともう、アフガニスタンもあるソ連も北方領土に来てるしね。かなり危機的な状態だから。ソ連だけ考えてればいい時代ですからね。朝鮮半島さえあんまり考えなくてよくて、台湾はもうあの頃はタブーだから。

村田 中東はどうですか。

岡崎 もうそんなものは全然問題じゃなくて、ソ連が攻めてきた場合だけ考える時代だから、5条だけなんですよ。

村田 先生が防衛庁にご出向の頃の防衛庁と外務省の関係はどうだったんでしょうか。さっきのお話では、防衛庁が人間扱いされない頃もあったということですが、その頃と比べると防衛庁も少しは発言力を増してきたとか。

岡崎 そりゃ、もう全然ちがいますよ。今はD I Aなんてのは外務省に来ずに防衛庁にだけ来る。外務省は怒ってますよ。

村田 先生がおられた頃からだいぶそうだったんですか。

岡崎 あのね、私まではみんな渉外事務だけなんです。渉外事務ってのは、在日米軍との接触と外交団との接触、それをやってたんですよ。私が着任してね、3ヶ月目くらいの時に、時の丸山次官がね、調査1課、調査2課おまえみろっていった。防衛局は防衛課、運用課、調査1課、調査2課で、1と2が情報全部やってたんですよ。それを私にみろって。これはね、今なら考えられないですよ。丸山さんは警察出身でしょう。情報ってのは魂ですからね。それを外務省にやらせちゃうなんてね。というのは、内調の誰を室長にして次長にするってんで、ものすごい喧嘩やってたんですよ。ポーンと外務省に調査1課と調査2課を任すなんて、考えられないですよ。ましてね、調査1課ってのはものすごい微妙なところなんです。調査2課ってのはおそらく中央官庁の中でもものすごくいい課ですよ、情報に関しては。それは別にして、調査1課ってのは、例のモニタリングやってるんですよ。それを警察がかかえてた。それを外にわたすって話だから。けどね、丸山さんて人はね、高文試験を通った内務官僚の最後なんです。そのあと数年にわたって、戦後警察に

入るなんてのはね、ただの就職のために人がいったわけですよ。彼から佐々のジェネレーションまでいない。丸山さんて人は、清廉潔白っていうか、お国のことしか考えない人でね。今でもいろんななんとか会長は、みんな丸山さんですよ。だから自分の後輩に任せられないと思ったんでしょう。だから、おまえやれってことで、それで私が情報担当になった。

村田 そういう肩書きだったんですか、情報担当って。それとも、実質的には情報担当だけでもって。

岡崎 辞令もらいましたよ、調査1課と調査2課を監督しろって。それ以来、調査1課と調査2課の監督、ひいては各幕全部の情報関係統括です、2部ってのは全部そうですよ。

村田 依然として国際担当参事官っていう言い方するんですか。

岡崎 そうです。私の2、3年前から涉外ってのはいかにも品がないから国際にしようって、名前だけ国際になってたんです。だから、今、国際担当参事官が事実上の情報部長ですよ。それでね、私が78年7月に赴任してね、そうしたらね、ソ連の動きが怪しいって、北方領土で。それで栗栖さんが発言してクビになっちゃった。

田中 そうですね、78年の春に北方領土にソ連がかなり強化したんですよ。

岡崎 それがわかんなかった。栗栖さんのは夏だけど、これ軍事演習だと思ったんです。これがね、背景があるんだ。その前に78年に日中平和条約。日中平和条約をどうしようかって話で、うちの高島さんはもう次官だったかな、審議官かな。この前みたいに外務省が割れるのが恐い。外務省が割れないようにするんだって、各局の参事官を全部集めてね。私は中東だからなんの関係もないんだけど、そういうことで入った。それで私一人断固反対した、また例によって。あれは明らかな反ソ同盟なんですよ。わかってやってるんならいいけど、誰もわかってないんだから。福田さんだって、周恩来に会って、これでやっと日中正常化の仕上げができましたねっていったら、周恩来はいや正常化はとっくに済んでますよって、これは覇権条項が大事なんだって。これは要するに反ソ同盟作るんですねっていったら、そんなこという奴があるかって騒ぎですよ。いや、これは中国と仲良くするというのは進歩的でいいことだから、最後に平和条約作るんだという。なにいつてんの、て話ですよ。やんやんやんやんいってて、ソ連も随分警告発してるんですよ。それで、僕は防衛庁いちゃったけども、いっちゃたらソ連が北方領土に出てきた。これはもう明らかに報復ですよ。それで、どうもこれは演習じゃなしに部隊を展開したってわかってきたのが、78年の11月か79年の1月頃。それでね、どうしようってんでね、私はもう今度は情報担当だから、これまとめて発表しちゃえって。それで発表したんですよ。えらい大騒ぎになった、国会でね。防衛庁が情報を出すってこと自体が、あんまりないことだし。それを発表したらですね、すごかったな、社会党から質問がわんさかわんさかきて。どうしてこの時期に発表するんだって。この時期とおっしゃいますけど、じゃあもう少しあとのほうがいいんですか、とかね、

そんなの答弁してましたよ、そうしてるうちに、これももう一度ソ連の嫌がらせだけど、79年の東京サミットで、その東京サミットの日にはミンスクがちょうど日本海に入るようにしてね。それで、その年の末にアフガン侵入。これですっかり、がらっと変るんです。ところがね、これがね、どっかでもう話したからいいですけど、あれで日本が真っ先にオリンピックをボイコットした。それから、そのあとの国会で私言いたい放題ですよ。ソ連の脅威をいおうと、潜在的脅威だけど、それから日米同盟をいおうと、抑止力といおうと、今まで使っちゃいけない言葉をみんな使った。

村田 同盟という言葉を使いましたか、国会答弁で。

岡崎 それは国会答弁でなかったかもしれない。それでね、なぜそうなったかという、北方領土のせいじゃないんですよ。11月にイランで革命があつて、アメリカ大使館が人質になる。それで、アメリカが同盟国にみんな経済禁輸を要求してくる。で、やりましょうと。そしたらね、日本の商社が石油買ってるのね。調べたら、6大商社はみんな買った。それで、11月にね、ヴァンス国務長官が記者会見してね、"Japan is insensitive"ていった。それでね、官邸が震え上がっちゃった。アメリカがついにおこちゃった、どうしようて最中にアフガン侵入があつたもんだからね、ここで失点を取り返そうと、そういうことなんですね。それで、僕は言いたい放題いって、今使ってるような言葉をほとんど使っちゃったですよ。それがまた先があつて、その翌年に鈴木さんが訪米の時に演説を作ったわけよ。

村田 先生お作りになったんですか。

岡崎 ええ、僕もちよつとは参画しましたよ。その中に、その前の1年間の国会答弁の言葉がみんな入った。あの人なにもわからないですからね。これなんだっていったら、いやこれは国会でいってることですよっていったら、ああそうかって。それでもう堂々と演説したらさ、プレス・クラブでもう拍手大喝采よね。それで喜んで、大成功、大成功って。帰ってきて、あの頃ファックスもなにもないから、アンカレッジまで来たらね、日本の朝刊のね、一面トップがね、ものすごい鷹派の発言をしたと。実は鈴木善幸はね、大統領がいやになるくらい日本は平和国家だとか、そればかりいった。それで、俺が大統領にいったことが、なんで出てない、とかね。日米関係は同盟じゃないとかね、なんかそういうことをごたごたいって、要するに僕は悪い子じゃないよって、叫びまくったわけよ。それで伊東外務大臣が辞めたとかね。そこまで話がいくわけ。それは元はそういう経緯があつたから。

田中 でも、同盟って言葉は、今おっしゃったのでいくと、80年くらいからですよ。抑止はもうちょっと前から使ってたんですか。

岡崎 抑止はね、前から使ってたけども、私が使ったのは確か、前の佐藤時代ですよ。それで新聞の論評があつて、最近政府はぬけぬけと抑止という言葉まで使いだした、その批判をおぼえてますよ。それと、ソ連の潜在的脅威。

村田 確か、山下防衛庁長官が使いましたよね。

岡崎 あれは私がいったんです、あれはもう外務省の了承をえてね。それは加藤欧亜局長が仲間だから。これを了承しろって。あとで加藤局長が外務省で随分つるし上げられた。橋本が今度アジア局長で、ああいうことするんなら、どうして俺に先にいわないんだって。おまえに先にいったら反対するに決まってるからって言いましたよ。

五百旗頭 それは70年代後半ですか。

岡崎 アフガンのあと。ですから、まさにインセンシティブが~~あ~~ってアフガン侵入があつて、オリンピックがあつて。

五百旗頭 でもその前からソ連の潜在的脅威てのはわりと出てきましたですね。

岡崎 でも国会で使っていて決めたのはあれからです。まあそれは調べればわかります。それから、仮想敵て言っちゃいけないのね。仮想敵は使わなかったけども、仮想敵ていうべきところにソ連でいってりゃいいんでね。もしソ連が攻めてきたらとかね。

村田 もう最後に多分に私個人の関心なんです、ちょうど先生が防衛庁の参事官の頃に、カーター政権の在韓米軍の撤退てのはどういうふうにご覧になりましたか。

岡崎 あつた、あつた。あれは僕は事前に反対してたんだけど。あれはね、ホルブルックだな。ホルブルックがね、日本は拒否権もってるわけじゃないっていいましたよ。僕は福田さんとは親しかったけども、福田さんはそれはアメリカのお決めになることですよって言ってしまった。本当にそうだったんですかつた聞いたらね、あの人も頼りないんで、下から上がってきた紙にそう書いてあつたって言っている。あの頃から僕は福田さんと疎遠になったんです、福田さんに期待してたんですけどね。

田中 日本のSS20に対する認識ってのは、福田さんのあたりから知ってなきゃいけなかったのに。

岡崎 なのに知らなかったんですよね。僕はアンチ田中・大平だったから、親福田だったんだけど、あの時頼りないんでいやになっちゃった。

五百旗頭 その後彼はどうなったんですか。アメリカがお決めになることですよといったけれども、やっぱり慎重にやるようにというんでカーターを。

岡崎 それは僕は知らない。あの時ね、ブレジンスキーに止めろっていったら、ブレジンスキーが話してくれた。大統領になってすぐに、大統領がブレジンスキーと朝飯食おう、で朝飯食ってたら、民主党政権になったら戦争になるってみんないつてる。それで考えたんだけど、戦争の始まりそうなところにアメリカ軍がいなけりゃいいんだと。

五百旗頭 まったく信じられないことをおっしゃる。そうブレジンスキーがいったの。

岡崎 いや、そうカーターがいったと、ブレジンスキーがいった。